

①事業の基礎情報

事業名	異校種間連携推進事業		担当部・グループ名	教育委員会 教育センターグループ							
実施期間	平成26年度～平成29年度		担当GL氏名	内藤 克己							
新規・継続の別	継続事業		電話番号(内線)	52-1111(内線 350)							
総合計画(基本計画)体系	個別目標	(4)学校・家庭・地域が連携を深め、12年間の学びや育ちをつなげます		予 算 ・ 事 業 名	<table border="1"> <tr><td>款</td></tr> <tr><td>項</td></tr> <tr><td>目</td></tr> <tr><td>事業名</td></tr> </table> 予算措置なし	款	項	目	事業名		
	款										
	項										
	目										
事業名											
こんなことに取り組みます	幼稚園・保育園、小学校、中学校の垣根を越えて、教職員同士が現場をふまえた情報交換を密にするとともに、子どもたちの交流を行うなど、発達段階に応じた教育を実践します。		総合戦略	<input checked="" type="checkbox"/> 該当する <input type="checkbox"/> 該当しない							
みんなで目指すまちづくり指標名	・学校が好きと感じている子どもの割合 ・学習に積極的に取り組む子どもの割合										
	現状値(H25)	・82 ・69	実績値(H26)	・88 ・77	実績値(H27)	・88 ・76	実績値(H28)		目標値(H29)	・85 ・75	(単位) %

②事業の概要

目的 (何をどうするために)	★子どもたちが「確かな学力」と「発達段階に応じた資質・能力」を身につけるため。 ★子どもたちが小学校や中学校の入学時に抱えている、不安やとまどいを軽減するため。 ★全ての幼・保、小、中教職員が、子ども一人ひとりに対して「12年間の学びと育ちを切れ目なくつなげる」という意識を持ち、個々の子どもの側に立ち、発達段階に応じた教育を行うため。		
対象(誰・何を対象に)	幼稚園児、保育園児、小学生、中学生 幼稚園・保育園・小学校・中学校の全教職員	対象の数量	11園、7校
最終目標 (最終的に何がどうなれば達成か)	☆全ての職員が、異校種間で連携しながら子ども一人ひとりに対して「12年間の学びや育ちをつなげて育てていく」という意識をもって、学年や年齢に応じた教育を実践し、教育基本構想の目標の1つである「幼児・児童・生徒の発達段階に応じた教育の実現に向けた学校間連携の強化」ができています。 ☆子どもたちが「確かな学力」と「発達段階に応じた資質・能力」を身につけて成長し、小・中学校入学時における不安やとまどいが解消・軽減している。		

③事業にかかる事業費概要

平成27年度(当初予算額)		決算額	主要内容
事業費総額(千円)		—	—
財源内訳	一般財源	—	
	特定財源	—	
	国・県支出金	—	
	その他	—	
補助事業・単独事業の別		単独事業	単独事業

④平成 27 年度の実施内容（目指す姿の実現に向けて、どんなことに取り組んできたのかを整理する）

	何を・どのように・どうした ※箇条書きで記載する	いつ(年月)	アウトプット
実施内容	◆異校種参観を年長、小1、小6、中1担当教諭で行った。	H27.5～	—
	◆中1生徒の学校生活意識調査を行い、異校種間連携推進委員会にて分析結果を報告した。	H27.6 調査 H27.8 報告	—
	◆幼保小中連携事業の年間計画を見直し、現状に合わせた。	H27.5～	—
	◆各園・各校の実態により子ども同士の連携事業を実践した。	H27.5～	—
	◆各園・各校の異校種間連携事業を集約し、まとめて周知した。	H28.1	—
	◆異校種間連携事業・異校種参観の成果と課題をまとめ、周知した。	H28.1	—
参画・協働・ 情報共有の工夫	★ 異校種参観：「参観シート」のコピーを自校、相手校、市教委、市役所のグループ間へ送付し、情報の共有に努めた。		
	★ 異校種参観：参観するポイントや各校に学んだ点を紹介するため「参観シート」の中から、ピックアップして委員会で紹介し、視点の拡大に努めた。		
	★ 異校種間連携事業：取組を各園・各校で工夫して発信し分かりやすく説明した。		
進捗状況	当初に掲げた計画どおり、順調に進めることができた。		
実施内容に 対する成果 (事業の自己評価)	☆ 異校種間連携事業は、子どもに上級生としての自覚を促し、説明力を高めさせた。下級生は、先の見通しがつくと共に、目標や感謝の気持ちを持ち、表現できた。		
	☆ 異校種参観は、教職員の園児・児童・生徒の発達段階への理解を深めた。		
	☆ 異校種参観は、指導法について疑問点を見出し、教職員間で話し合うことができた。		
	☆ アンケートの結果から、生徒のとまどいの原因を明らかにできた。		

⑤課題と今後の取組みの方向性（平成 27 年度を振り返り、課題を抽出し、今後の取組みの考え方を整理する）

課題	今後の取組みの方向性
<u>(1) 異校種参観の時間の確保</u> ・教職員には、異校種参観を行う時間が十分とれない。	・授業公開だけを参観対象とするのではなく、授業以外の生活場面や、市の一斉研究授業も参観対象として拡充する。
<u>(2) 異校種参観の意義の浸透</u> ・異校種参観の意義が職員全体に浸透しない。	・異校種参観の意義をまとめ、周知すると共に、異校種参観シートの内容から、意義に通じる内容をとりまとめ周知する。
<u>(3) 負担感の軽減</u> ・異校種連携事業では、上級学校の負担感が大きい。	・下級学校が、異校種間連携事業の目的を明確にし、上級学校側と事前に打ち合わせを行うよう、周知する。

⑥課題解決に向けた平成 28 年度の具体的なアクション（案）

	何を・どのように・どうする ※箇条書きで記載する	いつまでに(年月)
計画(案)	◆異校種参観の参観対象者と対象時間を拡大し、参観で得られた課題や効果を職員に周知する。	H28.8
	◆意識調査から得られた主な戸惑いの要因に対する対応策を実施する。	H28.8
	◆総合的な学習の時間の活動情報を各校で工夫して発信し成果の見える化を進める。	H29.3
	◆異校種間連携事業の意義を踏まえた目標を下級学校が明確にし、上級学校と事前に話し合うよう、周知する。	H29.3
参画・協働・ 情報共有の工夫	☆啓発用チラシは、写真を多く掲載し、事業内容を分かりやすく伝えていく。	
	☆各園・各校への依頼文は、意義を掲載する。	

特記事項